

アーティスト・サポート・プログラム

enoco [study? ]#5

実践報告書

前川 紘士

## 【プログラム概要】

タイトル：アーティスト・サポート・プログラム enoco[study?]<sup>#5</sup>

開催期間：2017年12月14日~2018年3月31日

アトリエ=資料室公開：2018年1月19日~21日、25日 2月17、18日、24、25日

中間報告会：2018年2月24日

最終成果報告：2018年3月31日

pdf 資料集 works(=)documents 公開(ver.0)：2018年3月31日~(更新予定有り)

過去10年分の自身が関わったプロジェクトの資料をもとに、滞在期間の3ヶ月間で新たなリサーチを加えることで、「作品群=資料群」に関するリサーチと更新式の資料群の作成・公開を行なった。

前半では、過去資料を元に様々な可能性を考え拡散的なリサーチに務め、「過去資料の整理」「新たな資料調査」「ヒアリング・取材」を経て、次第に「作品群=資料群」についてのリサーチ、その資料収集や整理、公開へとシフトしていった。

## 【経過】

0. 動機とプラン
1. 初回打ち合わせ
2. 過去資料の整理
3. 新たな資料調査
4. ヒアリング・取材
5. 資料室公開・来場者対応
6. 浅野竹二展
7. 中間報告&公開ミーティング
8. works(=)documents 撮影
9. 最終報告会と pdf 資料集公開
10. プログラムを終えて

※複数の要素を滞在期間中並走させながらリサーチを進行していったため、時間的には前後する部分もある。

※個別の詳細の一部は、別ファイル pdf 資料集 works(=)documents を参考。



## 1. 初回打ち合わせ (2017年12月14日)

私が拠点とする京都府向日市にある共同スタジオ「むこうスタジオ」に、enocoスタッフが訪問し、初回打ち合わせを行なった。準備した資料やスタジオの作品、制作環境自体を見ながら、今回の企画内容の確認(提出プランの大枠と公募企画側の規定の確認)を行なった。特にプランの中でも、この滞在期間を終えてからも続く様々な場での活動のための、複数のプロジェクト間を跨ぐような「リサーチ」に重点的を置きたい、という意志の確認と、最終報告のかたちのあり方、企画の枠組みについての確認や共有を行なった。

## 2. 過去プロジェクトの資料整理 (2017年12月16日搬入、12月一杯整理作業)

スタジオと自宅にあった「過去プロジェクトの資料」のおおよそ全てをenocoに運び込んだ。最初の段階では「資料」の範囲を、これまで保管してあった紙媒体のファイルを中心とし、模型や必要な書籍は後日持ち込むという形をとった。それらの資料を整理し直して室内に配置、一通り目を通す中で、複数のプロジェクトを跨ぐキーワードとして引き出せるような部分を改めて確認した。また、資料が分散し、あまりに未整理だったものに関しては、プロジェクトごとにまとめるなどの整理を行なったが、もう一段階整理を進めようとするると他のリサーチの時間をかなり圧迫することが見えてきたため、大まかな整理に留めた(12月中)。

整理の中で複数のプロジェクトに共通するキーワードとして、「プロジェクト内で生まれた作品群の取り扱い」「様々なかたちの協働」「再開発」の3つが浮かび上がった。それらのキーワードとの関連や、今回新たに始めていた大阪のリサーチとの接点、直前まで(2017年度)の活動の流れ(プロジェクトで制作した作品の紛失や記録、保管、管理の問題が複数の場から出てきていた)など、複数の要素が重なるという理由から、「ひと花プロジェクトの作品群の取り扱い」(※1)をリサーチの軸として選び(1月中頃)、他のプロジェクトの資料もその後のリサーチの中で参考にした。また過去に関わった場所について、プロジェクトの関係者に現状の確認を行なったが、このタイミングでの詳細な状況の確認が難しく、保留になった。



\*



●過去プロジェクトの資料(一部)。\*

※各プロジェクトの概要は、pdf 資料集 works(=)documents に記載。

## ※1 「ひと花プロジェクト」

正式名称は「西成区単身高齢生活保護受給者のための社会的繋がり作り事業」、愛称「ひと花プロジェクト」。2013年7月にスタートし、様々な問題を抱える同地域の高齢者の社会的繋がりを作ることを目的に、日中の活動場所として利用される「ひと花センター」を中心に活動している。大阪市西成区保健福祉課が事業主幹。受託事業者は連合事業体ひと花プロジェクト。

外部講師を招いた様々な表現プログラムを開くのが特徴の1つで、私は2013年9月から現在まで「美術の時間」という月1回のワークショップ・プログラムに講師として関わっている。2017年12月、そこでのワークショップ中や空き時間に作られ、ひとまずは保管されているが位置付けが曖昧な「ワークショップで作られた作品群」に注目した「かまがさき芸術資料庵」という派生企画を行った。以下、文中では「ひと花プロジェクト」と表記。

## 3. 新たな資料調査 (2017年12月17日以降随時)

最初期は、今回の滞在制作の協働相手でもありツールボックスでもある enoco 自体について改めて調べ、そこから遡るように、現在に繋がる大阪の文化行政の流れや旧川口居留地などの周辺地域についてのリサーチを進め、enoco 内にある資料の一部を集めた。

また、「複数の異なる資料を見比べることから始める」というプランから、「複数のものを同一平面に並べる・一つの場所に集める」ということ自体のモデルになるものや概念のような抽象的な内容についてのリサーチも行なった(例：アーカイブス、図書館、博物館、公文書館、ドキュメンテーション、インターネット、検索システム、脳、イメージ、美術の領域の先行例など)。

「過去プロジェクトの資料整理」が一定量進んだ段階(12月末、1月初め)で、そこから得たキーワードを元に、資料や文献に当たった。特に、「ひと花プロジェクトの作品群の取り扱い」をリサーチの軸にすることを決定した後は、「ひと花プロジェクトの作品群」を他のどのような「作品群＝資料群」と比較／関連付けが可能か、その接続先を探ることが、リサーチの大きい部分を占めるようになった。

作品群に向ける眼差しの例を、思いつく各領域から探していった(以下、一部書き出し/PDF 資料集に反映)。これまでの活動の中で既に行なっているリサーチの掘り返しも行い、新しいもので期間内の咀嚼が間に合わないものは、書籍であれば購入するという形で、継続的な時間の流れの中で関われるよう各資料に当たった。

[調査した資料に関するキーワード例]

心理学関係より：発達心理学(特に初期)、発達科学、生涯発達心理学、質的研究、心理学の歴史。  
人類学関係より：イメージの力展、Art and Agency、部分的つながり、虚構の近代、民族学のコレクション。  
教育関係より：自由画教育の歴史(19世紀イギリス)、生涯学習。  
福祉・医療関係より：芸術療法、アートセラピー、制度を使った精神医療/アール・ブリュット、1980年代以降の障害福祉施設の実践。  
運動・活動的なものとコレクション的なもの：イギリスのセツルメント運動やラスキン、モリスなど、版画運動や教育運動など美術における運動(東北の版画運動、山本鼎農民美術運動、北川民治児童画運動など)、ボイス、グループマテリアル、ティムロリンズ & K.O.S.と MoMA、その他多くの出来事の中に入り込んでいく実践など(特に1990年代以降)。



\*



●滞在期間中、enoco2階(ルーム9)を[アトリエ=資料室]として使用した。\*

#### 4. ヒアリング・取材 (2017年12月28日以降。非公式の聞き取りは随時。)

enoco スタッフとの打ち合わせ、資料調査などから、聞き取りの対象を設定し、期間内に5名の方にヒアリングを行なうことが出来た。enocoのネットワークに近い3名からは、大阪府の文化行政と開発に関する内容、残りの2名からは、「作品群=資料群」が実際の社会の中で制作され、集まり扱われている具体的な事例として取材に伺わせて頂いた(※2)。

1. 寺浦薫(大阪府府民文化部 文化スポーツ室 文化課 主任研究員)  
「大阪の文化行政(機関、コレクション/事業ベース)概要」@enoco (2017.12.28木)
2. 高岡伸一(enoco 企画部門チーフ/近代建築の専門家)  
「再開発\_江之子島周辺、大阪の開発、スラムクリアランスなど」@enoco (2018.1.19金)
3. 中塚宏行(大阪府府民文化部 文化スポーツ室 文化課 研究員)  
「大阪府 20世紀美術コレクションについて」



@enoco (2018.1.26 金) + 大阪府咲洲庁舎 (2018.2.6 火)

4. 稲垣智子(アーティスト/ARTCA 芸術教室主宰)

「美術教育・私塾・アーティストラン」

@大阪府岸和田市 ARTCA 芸術教室 (2018.1.27 土)

5. 児玉泰(高槻市第三中学校美術教諭)

「美術教育・公教育(中学校) 美術部の活動」

@高槻ギャラリー「からころ」(美術部の展覧会見学) (2018.1.26 日)

+高槻市第3中学校(後日訪問) (2018.2.19 月)

また、「ひと花プロジェクトの作品群」の様々な領域との接続をイメージするために、資料調査・上記のヒアリングと平行して他にも複数の取材先を探した。取材内容の精査や年度末という時期的な問題、並行して進めていた仕事量との関係で、滞在期間中にアポイントメントを取ってヒアリングの実行までは叶わなかったが、取材先の洗い出しなどを一定以上進めることができた。

上記の取材対象とは別に、改まった形での取材の機会では無かったが、今回の調査・関心に関わる聞き取りや相談を、滞在期間内に出会った様々な方に行なうことが出来た。偶然に寄るところも大きく、集中的なリサーチで情報の密度を高めている状態だったからこそ起こり得た展開だったと感じている。公式のリサーチだけではなく、小さな会話の機会の重要性を改めて感じた。



●大阪府 府民文化部 文化スポーツ室 文化課 寺浦薫さんへのヒアリングの様子。



●enoco も含む再開発エリアの景色。enoco 屋上から撮影。両脇のタワーがマンション、奥が2018年5月オープンの日生病院。enoco スタッフで近代建築の専門家でもある高岡伸一さんにこのエリアや大阪での再開発に関する話を伺った。



●大阪港にある咲洲庁舎(さきしまコスモタワー)内に設置された「大阪府 20 世紀美術コレクション」の作品。コレクション形成や管理の変遷、その背景の話を中心に、大阪府 府民文化部 文化スポーツ室 文化課研究員の中塚宏行さんにお聞きした。



●岸和田市にある芸術教室 ARTCA で制作された作品。主宰でありアーティストの稲垣智子さんに取材させて頂いた。



●高槻市第三中学校児玉泰教諭に、公立中学校における美術教育の例、特に美術部の活動についての話を伺った。

### ヒアリングを終えて

公式にアプローチ出来た5つのヒアリング先のうち3つはenocoの関係者だったこともあり、比較的早いタイミングで調整をつけることが出来た。大阪の文化行政の流れを、大阪万博のあった1970年ごろから追って見ることで、「コレクション」のような固定的な印象を持つものが、規模は異なるものの他の小さな作品群同様、状況依存的なものであることを確認することが出来た。取材先の残り2者は、今回の出会いの中から半ば偶然浮かび上がったのだが、依頼を快諾して頂き必要な取材を行うことが出来た。新たな取材先の数としては十分とは言えないものの、これまでの活動で訪れた様々な作品が作られる場所と合わせて見ることで、「各地に様々な作品群=資料群がある」という机上のイメージに、実在する事例としての手触りを加え、イメージや取材方法を具体的に検証する材料として捉えることが出来た。

それ以外のヒアリング候補についてだが、期間内の取材の実現までは及ばなかったものの、多くの取材対象の選定作業をこの機会に進めることが出来た。今後、可能なものは機会を見つけて取材を行いたい。

※2 ヒアリング対象の肩書きなどは 2017 年度当時のもの。

## 5. 資料室公開・来場者対応

(第 1 回資料室公開：2018 年 1 月 19 日、20 日、21 日、25 日、

第 2 回 2 月 17 日、18 日、24 日、25 日) ○37 名

1 月中旬と 2 月下旬に、enoco の制作スペースを[アトリエ=資料室]と題して一般公開を行なった(どちらの回もウェブとメールリストでの告知)。両期間とも、内容の公開・報告であると同時に、情報を集める機会としても利用した。また、一般公開の告知をしている日以外でも、来訪者があれば可能な限り対応し、プランの説明と進捗状況を伝え、意見交換を行なった。

## 6. 浅野竹二展 (展覧会会期：2018 年 1 月 4 日~16 日)

今回のリサーチの中で、偶然だが結果的にユニークな位置を占めるものになったのが、2018 年 1 月に enoco1 階ルーム 4 で開催された展覧会「浅野竹二展—名所版画 郷愁の京・大坂／自由版画 童心と詩情—」。当初は「大阪府 20 世紀美術コレクション」の実作を観る一つの機会、といった程度の認識だったが、鑑賞を進めるうちに複数の点に惹きつけられていった。

特に浅野竹二の生没年(1900 年誕生 1999 年他界)が、西暦と重なるという単純な事実から、キャプションに眼を向けるたび、時代の情報(年代)と竹二個人の情報(年齢)が常に同時に視覚的に入り込んでくるという体験が、複数のリサーチを同時並行に行なっていた眼には、とても興味深いものとして映った。

「ひと花プロジェクト」の 65 歳以上という「年齢」規定や、高齢期の制作物として、浅野竹二と「ひと花プロジェクト」の同年齢の頃の作品を見たときの相性、児童画を資料にイメージと年齢の関係を相対させ編まれた「発達心理学」の試みの連想や「個体の発達」「生涯発達」「質的研究」という視点やキーワード、西暦から推察できる「大阪の歴史」と竹二の個人史や作品との照合など、「イメージ」

と「年齢／時代」の間で揺れながら様々な視点を捉え直しながら見る事が出来、思いがけず充実した鑑賞体験になった。

他にも、今回のリサーチの他の部分と関連する興味深い点がいくつかあったのだが、特に「大阪府 20 世紀美術コレクション」にある作品と「ひと花プロジェクト」の作品を「個人の年齢で結びつけて見る事が出来る」ということが大きな手応えになった。この手応えが一つの下支えになり、年齢に焦点を当て「大阪府 20 世紀美術コレクション」のカタログを加工した「age book」や、作品群同士の比較を行う「works(=)documents」のアイデアを進める準備が行われていった。



●浅野竹二展のDM(中央右寄り)と大阪府 20 世紀美術コレクションのカタログ、その他資料。

## 7. 中間報告 & 公開ミーティング (2018年2月26日) O11名

中間報告を、リサーチ内容について口頭で話す「公開ミーティング」というかたちで行ない、1月と2月に行なったアトリエ公開同様、来場者からの意見や反応

を積極的に得る機会とした。簡単な過去作・活動の紹介のあと、使用している部屋や資料の説明を行い、今回のリサーチの進捗状況を伝えた。その後、来場者との意見交換を行なった。

「展覧会」のための中間報告では無かったため、成果として見えやすい具体的な「もの」が無い状態でのプレゼンテーションになり、そのこともあってか後半の意見交換では「(この滞在制作期間の)最後に何を観ることが出来るか分からない」といった意見が出た。またそれを端緒に「作品とは何か」という議論に発展した。

中間報告の時点では、様々なリサーチ・作業が並行して進行中で、期間内の展開にもまだ複数の可能性があったため、質問に対して、この部分が作品である／無いと言い切ることは出来なかった。個別の活動を活性化することが出来るのであれば、近代的な形式での「作品」と呼ばれるものが必ずしも必要な訳では無いと考えている、という現時点での意見を表明することになった。

他にも個々の立場から、展覧会という形式や対象への関わりの深度などについてコメントや意見が上がり、充実した集まりとなった。



●中間報告の様子。

中間報告を終えて

中間報告を経て、滞在期間の成果の公開方法に「最終報告会の開催」と「資料の pdf での公開(更新式)」の 2 つを選んだ。リサーチの仮設的な成果=資料から抽象化を経た作品として公開するのではなく、リサーチ内容を直接的に反映した資料を「最終報告会での紹介」と「pdf 資料集」という 2 つのかたちで公開することに決定した。各資料同士は、敢えて固定的なものとしては編み込まず、それぞれ独立した資料としてストックされ、滞在期間後のリサーチから新たに得られる情報に対して、それぞれの資料が関係を持ちうる開かれた状態にする。

もちろん資料を直接的に公開、といっても、公開の為の編集は行われる。現実の世界にあるものと、私の記憶の中にあるもの、ハードディスクや自宅にあるデータと、最終報告会、pdf 資料とではそれぞれ情報のあり方が異なる。中間報告後-最終報告までの最後の 1 ヶ月間(2018 年 3 月)は、結果的には、公開の為の準備期間(資料整理=情報の公開レベルの整理の為の期間)になった。

## 8. works (=) documents 撮影 (2018 年 2 月 21 日、3 月 11 日、16 日、28 日)

「自律した作品であり且つ同時に作品を取り巻くものについての資料でもあるものの集合を works(=)documents という語で改めて捉え、現時点で特別に意識されていないだけで、社会の様々な場所に多様なかたちで既に存在しているであろうそれら作品群=資料群のあり方や関係を探る」という大まかなイメージをゆっくりと発展させていった。

アイディアの由来は、ある作品群を単独で見るのではなく、他の作品群と比較・関連付けることで、単独では弱い(価値が低いとされてしまい易い)作品群に新たな価値を見出す機会を作れるのでは無いか、という仮定が元になっている。具体的には「ひと花プロジェクトの作品群の取り扱い」について考える中で生まれてきた。また、これまでの活動で複数の作品制作の場を行き来し、実際に関わる中で得た、制作・生産される作品とその環境の関係を相対的に見ることへの関心もあった。

当初(12 月末)は臃げなイメージだったが、複数のプロセスを進めるに従い、少し



ずつ具体性を帯びさせながらそれについて考えることが出来るようになってきた。2月初旬、アイディアに具体的な手触りを与え、それを確認する為に、enocoに保管されている「大阪府 20 世紀コレクション」と私が持ち込んだ「ひと花プロジェクト」「アートリンク・プロジェクト」(※3)の作品群を実際に比較＝撮影してみる作業を行うことにした。

7,800 点以上ある「大阪府 20 世紀美術コレクション」と「ひと花プロジェクト」「アートリンク・プロジェクト」の作品群を比べるため、「大阪府 20 世紀美術コレクション」から、キーになった浅野竹二の版画作品を中心に、媒体・モチーフ・テーマ・年齢などを参考にリストを作成し、enoco の学芸員と調整、撮影作品の候補を選出した。撮影方法は、最初から撮影のポイントが明快に理解出来ている訳では無かった為、セットを組んでの固定的な撮影ではなく、柔軟に拡張変化できるようスナップショットで行なった。「大阪府 20 世紀美術コレクション」は enoco スタッフがいる環境でしか作品を取り扱えない。学芸員やスタッフの拘束時間や滞在期間中で扱える時間が限定されている為、滞在期間終了後にじっくり比較検討可能なサンプルとなる写真の撮影量を増やすことを目標に、撮影計画を立て合計 4 回行われた。

撮影準備・作業をする中で、学芸員や enoco スタッフとの意見の交換も行われた。コレクションについて初めて知ることも多く様々な発見があったが、本質的なものとして、作品(群)の比較の目的についても話し合われた。

「守られた作品群」と「保護を受けていない作品群」を比較することで、どちらかを単純なかたちで評価(肯定／批判)する、といったことが目的ではない旨をまず伝えた。「スケールも背景も異なるものを、まずは実際に並べて見てみる(見ようとする)」ことで、どのような発見や感情を得ることが出来るのか。それにより何が共有され、背景は如何に作用し、何がそのような方法では可能／不可能なのだろうか。絵(作品)が集合としてある、それらを「見比べる」、あるいは「合わせて見る」ことについて考える材料を得たい旨を伝えた(もちろんその中に複雑な力関係を見ることも可能ではある)。

実際に撮影を行なって見えてきたこととして、個々の絵を評価する視点から離れて作品を見比べた時の、個別の作品や作品群のイメージへの作用があった。

異なるアーカイブから引き出された2枚(あるいは複数)の絵を並べ目の前にした時、私(の脳)は、その2つの絵を関連付けようとし、短い仮設の物語のようなものや、部位の関連、形式的な異同を見つけ出し、それぞれ絵についてのイメージを更新させる。絵が背景に持つ情報を考慮に入れる場合もあれば、形式的な特徴に照準が合うときもあるが、絵が並び、それらを見比べることで、各作品群の中にあるだけでは見えなかったそれぞれの作品への新しい視点が生まれることを具体的に実感できたことは、一つの手応えだった。またこの作業の繰り返しから、作品の組み合わせだけでなく、元の作品群自体のイメージも更新される。手持ちの条件の中で時間の限り撮影を行い、のちに振り返るための素材を作成した。



●enoco2 階ミーティングルームでの works(=)documents 撮影準備風景。収蔵庫から出してきた「大阪府 20 世紀美術コレクション」は、作品のレイアウト作業も、enoco の学芸員、もしくはスタッフの管理の元行う必要がある。「ひと花プロジェクトのワークショップの中で作られた作品群」は、ひと花センターに保管し、前川が保管状況を時々確認している(2018 年 3 月現在)。今回はセンターの許可を得て持ち出している。「アートリンク・プロジェクト」の作品群は 3 分の 2 が紛失。残った作品と記録資料は前川の個人管理。

### ※3 「アートリンク・プロジェクト」

ここでは、過去に参加した「奈良県障害者芸術祭 HAPPY SPOT NARA 2011-2012」で行われた協働制作のプロジェクトを指している。2011 年度に奈良県内の福祉

施設に通う那須大輔と約5ヶ月間の協働制作を行なった。2017年に同企画の振り返り展が行われた(「HAPPY SPOT FUTURE」)。

同プロジェクト名は協働制作のスタイル(作家と参加者の”対等な立場での”協働制作)を指しており、奈良でのこの例に限らず各地で様々な主体により実践されている。

## 9. 最終報告会と pdf 資料集 (2018年3月31日) ○17名

2018年3月31日、最終報告会を行った。最終報告会は、審査員を招いての公開レビューとして開催された。

2月末の「中間報告」からの改変点として、滞在期間の活動を紹介する会場として enoco のギャラリースペース(room2)を使い、リサーチに紐づいた具体的な資料群を整理した上で配置した。私がリサーチの中で感じていた手触りの部分を、来場者と具体的なものを介して部分的にでも共有できるよう空間を作った。

室内に配置したものは、works(=)documents の撮影に使った「大阪府 20 世紀美術コレクション」「ひと花プロジェクトの作品群」「アートリンク・プロジェクトの作品・記録群」の一部、「作品を並置し撮影した画像の投影」の他に、「現在勤務する福祉施設で作成した記録資料」、「滞在期間内の取材先の記録」、「pdf 資料の紙刷り」、「複数回手に取った書籍や資料」、「age book」など。また付属資料として、「マインドマップ」と「pdf 資料の最初のバージョン」を配布した。

報告会は、enoco 内で利用した各部屋を一通り案内した上で、先のギャラリースペース内で行われた。その後は基本的には、室内にある滞在制作中に触れたものとそれに関する資料の紹介を一つ一つ行い、間にプログラムの審査員や enoco スタッフ、来場者のコメントや質問とそれへの返答、という形で行われた。

同時に pdf 資料「works(=)documents」の第1バージョンの公開も行った。この滞在期間に端を発するリサーチの資料を公開した。整理作業の進展や、新たなリサーチが行われた際は enoco のウェブサイト随時追加される予定。資料集はあくまで序列のない個別の資料の集合として束ねられ、新しい資料の追加によ

り、個々の資料の結びつきが変化する(それにより内容の重心が変化することを許容する)ものとしている。

なおプロセスの概略の共有に関しては、この実践報告書が担う。



●enoco4 階ルーム 2 に最終報告会のためのスペースを設営。\*



●左から、works(=)documents pdf 資料より「高槻市第三中学校」「芸術教室 ARTCA」の資料、「非常勤として勤務先の福祉施設」の記録ファイル、これまでプロジェクトで関わった「アートリンク・プロジェクト」と「ひと花プロジェクト(かまがさき芸術資料庵)」の作品と資料の一部。向かい側の壁の「大阪府 20 世紀美術コレクション」と合わせ、各地

にある「作品群=資料群」の例として提示。\*



●age book。大阪府 20 世紀美術コレクションのカタログを編集。\*



●マインドマップの例。来場者には参考資料として配布した。\*



●最終報告会の会場角に置いた参考資料。報告会中に参照できるよう、これら一部の資料をもう一室[アトリエ=資料室]から持ち込んだ。\*



●最終報告会の様子。空間に用意した各資料を指差し確認し、意見のやりとりを行う中でリサーチの全体像を共有していく。



●公開レビューのゲスト審査員、奥村一郎さん(和歌山県立近代美術館 学芸員/机中央)と小林瑠音さん(文化政策研究者/机奥右手)。



## アーティスト・サポート・プログラム enoco[study?]<sup>#5</sup> 前川紘士 実施報告

TOP | イベント | enoco[study?]<sup>#5</sup> 前川紘士 実施報告

2013年にスタートし、5回目を迎えたenoco [study?] は、公募で選出された若手アーティストの活動をサポートしながら、「社会や他者との関わりを通して、アートの可能性を拓(ひら)くこと」にまつわるさまざまな問いを投げかけ合い、[study] 【＝能動的に勉強する・検討する・観察する・練習する）としていくプログラムです。

<sup>#5</sup>の公募で選出されたアーティストとして、2017年12月から2018年3月にかけて前川紘士がenoco館内にて実施した制作活動のプロセスをまとめた実施報告書を公開します（近日公開予定）。また、前川の過去プロジェクトと今回の制作活動の中で行ったリサーチをまとめた資料を電子「works (+) documents」とし、公開します。なお、今後この冊子は、随時リサーチ・資料が追加された場合に随時更新されていきます。

works (+) documents [vol.0 PDF]

enoco[study?]<sup>#5</sup> 実施報告書 [PDF] ■近日公開予定

▼公募と審査についてはこちら

【活動プロセス】

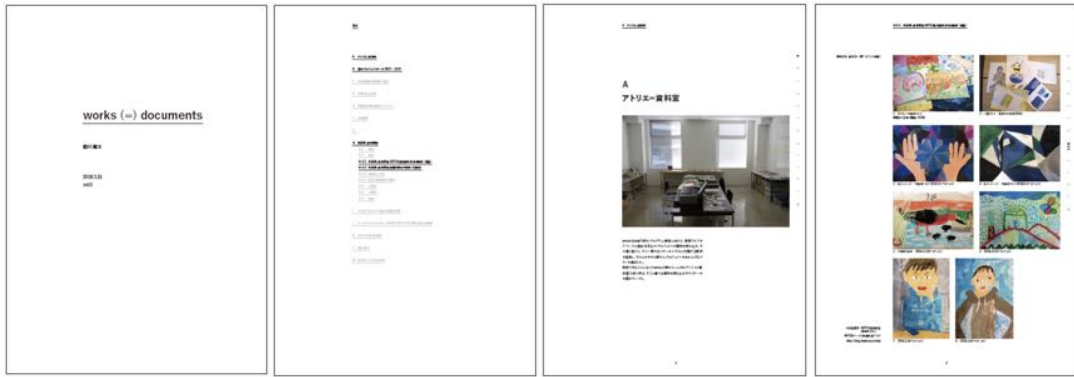
2017.12.14 アトリエ訪問 @むこうスタジオ

2017.12.21 enoco制作スタート アトリエ＝資料室整備開始、過去資料の整理・比較・リサーチ等開始

2017.12.28 ヒアリング①大阪の文化行政 @enoco

2018.01.04 アトリエ＝資料室 enocoスタッフ限定公開開始

2018.01.12-28 流野竹二展鑑賞、ヒアリング・リサーチを随時行う



●pdf 資料「works(=)documents」のリンクが貼られた enoco ウェブサイト。enoco ウェブサイトからダウンロード可能。

下段は中身ページの一部。

撮影：麥生田兵吾（\* 付きの写真）

## 10. プログラム期間を終えて

今回の滞在制作では、自身の過去プロジェクトの資料群を元に、複数の方法でのリサーチを一斉に進め、有機的に展開させて行った。結果、複数の作品群=資料群同士を関係付け、そのあり方を検討する「works(=)documents」や、作品と年齢の関係に注目した「age book」のような視点が得られた。

成果の共有は、滞在期間中の「資料室の公開」と「最終報告会」、「pdf 資料 works(=)documents の公開」（およびこの報告書）というかたちで行った。3ヶ月という事業期間枠への回答を第一義としてリサーチのスケールを合わせるのではなく、その後も続く活動の時間に属するようリサーチを、如何にこの機会に配置出来るかを探ること自体も今回の試みの一つだった。今回は、調べた内容を抽象化して「作品」を作り展覧会で共有する、という形ではなく、現実から引き出した情報の整理や編集を行う「資料化」とその「再配置」という方法によって、この機会を最大限活かし、今後のリサーチや様々な場で実践される活動を活性化するための材料を作ることを目指した。

固有の文脈で作られ集められてきた「大阪府 20 世紀美術コレクション」や「ひ



と花プロジェクト」の作品群を隣に並べ、改めて見直すことで、それぞれから新たな側面が見えることを実感出来たことは大きな手応えだった。またそれぞれの文脈から一旦切り離し、複数の作品同士を付き合わせ、まとまりとして見てみることで現れる「質のようなもの」をどう捉えるか、といった新しい関心も生まれた。全く異なる作品群との比較も検討に入れ、作品群同士を関連付ける、作品を集合として見る、ということについてももう少し考えてみたい。

今回撮影したもの以外にも社会の様々な場所にある作品群＝資料群に関するリサーチは今後も続けたいと思っている。少なくとも具体的な幾つかの取材候補はこの機会に既に上がっている。滞在期間内で得た成果に今後のリサーチを加える中で、様々な作品群＝資料群同士を関連させ、そのあり方を探る「works(=)documents」のアイデアを発展させたいと思っている。pdf 資料集 works(=)documents が今回の滞在期間とその後の時間をつなぐ足場になる。必要に応じて資料集も更新する予定なので、自身の諸活動のペースに合わせて進めていきたい。

また、「ひと花プロジェクトの作品群」の当のプロジェクト内での位置付けは、まだ現在のところ未確定のままで、依然何かの拍子で散逸する可能性がある。今後の活動の中で、どのような形で取り扱うことが可能なのか(/不可能なのか)、今回の考察も踏まえ、こちらも継続し、模索しながら進めていこうと思っている。

前川紘士 (2018年6月12日)